

物語のチカラ

The power of
storytelling

小説は、人の心だけでなく、地域や社会にも静かに影響を与えていきます。歴史小説を中心に、多彩な作品を生み出してきた作家・赤神諒先生。今回は、その創作の背景にある考え方や、物語が人と地域にもたらす力について、お話を伺いました。

『はぐれ鴉』から広がる出会い

——大分県竹田市を舞台にした代表作『はぐれ鴉』は、ドラマ化や地域イベントへと展開が広がりました。この反響をどのように受け止められましたか。



竹田の地で息づく武士の物語

赤神氏 竹田市から資料をご提供いたいたことが、物語の出発点になりました。当時の竹田市長の熱量が強く、私自身の創作の背中を押していただいた

実感があります。作品が生まれ、そこからドラマ化へとつながり、ドラマの上映会や地域イベントが開かれる。そして「はぐれ鴉饅頭」のようなユニークな商品まで生まれました。物語が地域の誇りや賑わいに変わっていく過程を目の当たりにし、作家としてこれ以上の喜びはないと感じています。人が集まり、交流が生まれ、町全体が盛り上がる。その循環“こそが、物語がもつ力だと改めて感じました。

芸術と小説が生む化学反応

——近年はアートとの協働にも積極的に取り組んでおられますか。小説と芸術が交わることで、どのように広がりが生まれていますか。

赤神氏 私は常に発想を外に求めていきます。その延長として美術検定1級（アートナビゲーター1級）を取得し、美大で学びながら芸術家の人生を小説にしています。明治期の画家・青木繁を題材にした作品では、芸術と貧困の問題を取り上げました。コロナ以降、アーティストが厳しい現実に置かれる

を実際の商品にしました。小説の中で飲まれる酒を現実に味わえる体験は、読者にとって特別なものですが、地域の方々の誇りにもなります。



夏鷲コラボ

未来を照らす物語のチカラ

——最後に、先生にとつて「物語のチカラ」とは何でしょうか。

赤神氏 物語には人を元気にする力があると思います。読者が勇気を得て、

地域が励まされ、やがて日本全体が少しずつ前に進む。その一端を担うべく、私はこれからも書き続けます。物語が人と地域をつなぎ、未来を切り拓く。その確信こそが、私にとっての創作の原動力です。

赤神諒先生の語りから浮かび上がるのには、物語が地域を動かし、人を励まし、国境を越えてつながりを生む姿です。PC一台で生み出される「物語のチカラ」を、私たちは信じたいと思います。

赤神諒が描く「物語のチカラ」



小説家
あか がみ りょう
赤神諒氏

上智大学大学院法学研究科教授。日本学術会議会員。博士(法学)、弁護士として環境法・行政法を専門しながら、本格歴史小説・時代小説も執筆。『大友二階崩れ』で第9回日経小説大賞、「はぐれ鴉」で第25回大蔵春彦賞、「佐渡絢爛」で日本歴史時代作家協会賞作品賞ほかを受賞している。



赤神先生のお話から感じた
物語のチカラ

- ①物語は地域の歴史や魅力を再発見させる力がある
- ②人と人をつなぎ、まちに誇りと活気を生み出す
- ③国境を越えて文化や心を結び、新たな未来を拓く

インタビュー
石黒 加奈子
(いしごろ かなこ)
株式会社ハル
コミュニケーション・
プランナー

中で、社会が芸術にどう向き合うべきかを聞いたかったのです。

さらに近年はアーティストや学生とのコラボレーションも行っています。小説を題材にした作品を募集するコンテストや美術大学との協働など、ジャンルを超えた表現が生まれる場をつくっています。小説から絵画、音楽へと広がるような“化学反応”こそ創作の醍醐味であり、新たな読者に届くきっかけにもなりうると思います。

——これまでのお話を伺っていると地域との協働が数多くあります。具体的にどのような形でコラボレーションが生まれているのでしょうか。

赤神氏 福井市では、戦国時代の朝倉氏を描いた作品をきっかけに朗読会を開催しました。文字で読むだけでは捉えきれない物語の息遣いを、声にして届けることで、参加された方々が地元の歴史をより身近に感じてくださったのが印象的でした。岡山では酒蔵と協力し、作品に登場する日本酒